

電子部品の焼成設備などに使用される炭化ケイ素発熱体。主要メーカーであるシリコニット（志木市）は一九四七年の会社創業以来、電気炉との二本柱という経営路線を貫く。国内で炭化ケイ素発熱体を製造できるのはほかに二社だけ。少量多品種の受注生産に特



化し「ニッチの中でもさらにニッチを狙う」（吉田守社長）考えた。

「六十年間一貫して、ほかのものには目もくれず、炭化ケイ素発熱体を作ってきた特殊な会社」。吉田社長はシリコニットをこう説明する。東邦電力（現中部電力）が戦前の一九三七年

発熱体 ニッチで生きる

シリコニット



吉田守社長

《会社概要》

▽本社	埼玉県志木市下宗岡4-9-9
▽社長	吉田守（よしだ・まもる）
▽電話	048-471-1435
▽売上高	7億5700万円（06年9月期）
▽従業員数	約60人
▽事業内容	炭化ケイ素発熱体、電気炉製造

に軍需関連製品の製造を目的に設立した東邦産業研究所が前身。当時の名残で現

炭化ケイ素、新用途に期待

在でも中部電力グループが鉄鋼、非鉄金属の熱処理、約三七%を出資する。

非金属発熱体で最もよく焼成など幅広い。

炭化ケイ素発熱体を製造するのは国内でシリコニット、東芝セラミックス、東海高熱工業の三社。大手を度高い千五百度まで発熱できる。単位表面当たりの発熱量が約五倍あるのが特徴だ。物質を均等に加熱でき利点もある。使用分野は

炭化ケイ素発熱体を製造するのは国内でシリコニット、東芝セラミックス、東海高熱工業の三社。大手を度高い千五百度まで発熱できる。単位表面当たりの発熱量が約五倍あるのが特徴だ。物質を均等に加熱でき利点もある。使用分野は

「大手の中で生き残るには特注品をいかに取り込んでいけるかだ（吉田社長）。大手が手を出さない規格外の商品を積極的に受注。納期の短縮にも力を入れ、同業大手にもOEM（相手先ブランドによる生産）供給する

炭化ケイ素発熱体は温度を調節するための電源設備などに費用がかかる。今の代が受け継いできたモノづくりの技術を受け継ぎ、小粒でもびりりと辛い企業で

「今後炭化ケイ素発熱体とその関連商品でニッチな分野の市場を開拓する。」



炭化ケイ素発熱体は1500度まで発熱できる（志木市の本社工場）

など技術力には例え、焼鳥屋の熱源。炭化ケイ素発熱体は熱調節が簡単にでき、遠赤外線の効果により加熱物にしっかりと均一に火が通る。おい